

# 月刊 土日 技術

## フリー誌 創刊号

二十一世紀に生きる我  
我、真に必要なものは  
週末力である。(哲学者)

週末なににする？



we are  
weekenders.

中西玲人  
東 朋治  
桂 枝之進  
森田順子  
吉川公二  
河北航太

September  
2021 9

アーベント

表紙 the rocket gold star

## 日本全国放課後三昧①

—「自由業者」の週末—

東 朋治



自由業。決まった時間と場所に毎日出勤する会社員や毎日シャッターを開ける自営業でも、税理士等の専門資格を持って活躍する士業でも決してない。

自由業の定義は分からぬが、自宅を事務所としているため出勤する必要もなく、従業員も雇用していないフリーで活動している者を指すと認識している。何の資格も必要とせず「私は〇〇です」と自由に名乗れば、自由業者の出来上がりである。

私は、自由業者である。「まちづくり」を生業にしている。都市計画の専門家でも宅建業者でもない。デザインセンズを含めた絵心など皆無。まちづくりでも主に商店街活性化を専門としており、何の資格も必要としない。ただし、依頼そのものが無ければ無職と変わらない。

上司に指図されず、部下に気を遣わず、満員電車で揺られることもない。コロナ禍以降主流になりつつある（かもしれない）リモートを先取りしていると見えな

くもない。

組織に所属せず、営業店舗（事務所含む）を持たない自由業者（私）には週末という概念がない。三百六十五日二十四時間常在戦場といえる。しかし、仕事の依頼がなければ三百六十五日すべてが週末であり、休日になってしまふ。

一九九九年から十一年間、神戸新長田地区の震災復興再開発および商店街活性化を推進する二つのまちづくり会社に所属していた。当時の私は普通のサラリーマンだった。上司や役員のご理解もあり、かなり自由だった。土日もイベントばかりだったが、休みの日はしっかりと完全な自由があった。オンとオフが自然に切り替えられていた。

二〇一〇年から大阪府内のシンクタンクに役員として転籍し、二〇一七年に自由業者として完全独立すると、オンとオフの境目が完全に滅失。そして、平日と休日の境目も無くなった。

そんな不要不急かつ自由業者の私だが、

神戸新長田を離れて十一年間、北海道から沖縄まで様々な地域に御縁を頂いてきた。コロナ禍で幾分訪問範囲は狭まっているものの、北は福島県（会津若松市）、南は福岡県（北九州市）まで十数地域を月一回以上訪問している。

二十代の頃から、私には一つの夢と一つの目標があった。

一つの夢は、日々日本中を旅して、その土地の仲間と地元の方の行きつけの店で名物料理を着に酒を酌み交わし、場末のスナック等でママたちと色んな話をすることである。

私の趣味の一つが読書である。ミス터리と旅またはグルメエッセイしか読まないが。

大学生の頃、椎名誠先生の旅エッセイに夢中になった。先生は日本中を旅しながら現地で講演し、先生を慕う仲間たちと酒を酌み交わし、移動中に小説やエッセイの原稿を書いておられる。金とヒマさえあれば、旅はできる。ただし、毎日のようにその土地の方々と胸襟を開いて酒を酌み交わすことは容易ではない。ちなみに私は金もなく、ヒマも何故かあまりない。

しかし、この夢が叶ってしまった。私も毎晩のように全国津々浦々の商店街

(まちづくり) 関係者と地元ご用達の名店で鯨飲し、その土地、その店の名物を鬼喰している。椎名先生と私の違い。先生は講演、私はワークシヨップや会議の進行。先生は移動中に小説やエッセイを執筆、私は報告書やレポートの執筆である。

一つの目標は飲食店を経営すること。それも、串カツ屋である。この目標もコロナ禍真ただ中の二〇二〇年にかなり異質なスタイルだが叶ってしまった。このハナシは別の機会で。

平日と週末の境界が滅失している生活の中で、明らかな違いが一つある。休日にはクライアントからの電話やメールが皆無なのである。

私の活動先は商店街や市場がほぼ十割を占める。ただしそのクライアントも地方自治体(県・市)、商工会議所や商工会、国の外郭機関がほぼ十割。コロナ禍以降特に顕著な傾向として、クライアントの皆さまは「週末」を過ごされている。オノとオフの境がはつきりしている。三百六十五日二十四時間「自由」な私でも、平日は来るか来ないか分からない依頼やクライアントからの緊急要件に備えねばならず、落ち着かない日々を過ごしている。昼酒など当然楽しめぬ。一方で土日

祝は解放される。気分も高揚する。滅失していたはずのオンとオフの境目が浮かび上がる。

そんな週末の私の楽しみみの唯一が、映画館である。DVDの自宅鑑賞でなく、映画館で映画を観ることである。

国内、海外、宇宙、果ては三次元(アニメ)まで。何も考えず大音量で巨大スクリーンに映し出される仮想世界に頭を空っぽにして身をゆだねる。極上のひと時である。

学生時代は映画館で映画を観ることなどなかった。働き始めてから映画(館)鑑賞が圧倒的な趣味に。二十代の頃は年間一〇〇本以上スクリーンで満喫。週末は何本も映画をハシゴしていた。

フリー稼業(自由業者)になると映画を観る時間は無限に増えると思いきや、前述の通り逆に減ってしまった。それでも急ぎの仕事(報告書や資料作り)がない週末は映画館に足を運ぶ。この十数年で、日本全国の街なか(駅前や商店街)から昔ながらの映画館が駆逐され、シネコンに移行。それも街なかでなく郊外のショッピングモールで幅を利かせている車でしか行けない。必然的に、映画鑑賞後にちよつと一杯の酒が呑めなくなる。私の訪問先でも、映画館が街なかから無

くなり復活させたいという希望を頻繁に耳にする。

レンタルDVDどころか今はネットで映画を観る時代。しかし、DVDやネット映画では私の週末は完結しない。巨大スクリーンからの、生ビール。その間に銭湯を挟むこともある。

街なかに映画館、それも二本立に名画座などがある街はそれだけで魅力満点である。そして、その周りには必ず安くて旨い酒呑み処がある。

神戸新開地には二本立て映画館が二館も屹立。商店街やその周辺も昼呑みできるところがたつぷり。二本立てを鑑賞満喫し、銭湯に浸かり、生ビールやハイボールをやりながら串カツを頬張る。一日満喫して四〇〇〇円も掛からない、自由業者アヅマの至福の神戸週末である。

(あづま・ともはる)

## 東朋治

株式会社商業タウンマネジメント代表取締役



一九七四年神戸市長田区生まれ。製鉄工場勤務を経て神戸新長田地区の震災復興に十年以上従事。二〇一〇年大阪府内のシンクタンクに転籍。二〇一七年(株)商業タウンマネジメント設立。

中心市街地や商店街活性化、新規創業者伴走支援や空き店舗対策、名物づくり、被災商業地域の復旧復興、商業施設再整備及び運営など北海道から沖縄まで活動中。趣味は読書、映画(館)鑑賞、そして全国津々浦々の訪問先でその地の皆さまと酒を酌み交わすこと。